

## 第 15 期生 卒業エッセイ

### とにかくつなげ

第 15 期生 合場 将貴

私は、ゼミ HP を閲覧することが大好きだ。過去の先輩方がどのような思いで、ゼミ生活を送り、巣立られたのか。直接お会いしたことの無い先輩でも、まるで直接私に話しかけてくださるかのように感じ取れるのが、各イベントページであり、OB・OG 会誌に所収されたエッセイである。実際、入会試験を受ける前に、100 人以上の先輩方のエッセイを読んだ。「君をどうしても入れたくない人がいる。」<sup>1</sup>と言われた第 11 期 OB 伊礼大夏志さんや、「君を小野ゼミに入れるメリットがわからない。」<sup>2</sup>と言われた第 12 期 OB 荒井礼さんのエッセイを読み、入会面接の厳しさを目の当たりにし、必死に準備をしたのは懐かしい。小野ゼミに入会した暁にはゼミ長になりたい、と考えていた私は、歴代のゼミ長の方のエッセイを何度も読んだ。「最強かつ最高のゼミにしたい。」<sup>3</sup>という第 7 期 OB の氏田宗利さんのセリフに武者震いしたり、私も、第 12 期 OB の梶田伸吾さんのように、感極まって「泣き虫ゼミ長」<sup>4</sup>になるのかなと思ったり、とにかくどんなゼミ長になろうか想像を膨らませていた。

この卒業エッセイを執筆するに際して、改めてゼミ HP を振り返ると、2 年間の思い出が鮮明に蘇る。泡盛を痛飲した沖縄での夏合宿、新年早々、お神酒を飲みすぎた明治神宮での初詣、とある OG の方に乗せられてテキーラを飲みすぎたせいで、鞆も持たずに、いつのまにか千葉県のお物井駅にたどり着いていた OB・OG 会など、記憶を飛ばしてしまったという記憶が、まるで昨日のこのように思い出される。



沖縄での泡盛痛飲事件から一夜明け、  
反省の色を見せる著者（右側）

おびただしい数のお神酒に対峙したゼミ生たち  
（著者は右から 2 番目）

しかし、小野ゼミで過ごした日々の中で、ゼミ HP には掲載されていないものの、取り留めもない日常もまた脳裏に浮かぶ。マケマネの授業後、小野先生とともに蒲田に赴き、特製ニンニク醤油を添えて食べ

<sup>1</sup> 小野晃典研究会 HP、トラブルトラベラーの珍道中、[http://news.fbc.keio.ac.jp/~onosemi/persons11/11\\_irei\\_14.pdf](http://news.fbc.keio.ac.jp/~onosemi/persons11/11_irei_14.pdf)

<sup>2</sup> 同、“小野ゼミ生”になるために、[http://news.fbc.keio.ac.jp/~onosemi/persons12/12\\_arai\\_15.pdf](http://news.fbc.keio.ac.jp/~onosemi/persons12/12_arai_15.pdf)

<sup>3</sup> 同、簡単に、[http://news.fbc.keio.ac.jp/~onosemi/persons07/07\\_ujita\\_10.pdf](http://news.fbc.keio.ac.jp/~onosemi/persons07/07_ujita_10.pdf)

<sup>4</sup> 同、泣き虫ゼミ長、[http://news.fbc.keio.ac.jp/~onosemi/persons12/12\\_kajita\\_15.pdf](http://news.fbc.keio.ac.jp/~onosemi/persons12/12_kajita_15.pdf)

た金春の羽根つき餃子。12月になっても市川君の論文のテーマが決まらず、本ゼミ後、先生とともに駆け込んだ、つるの屋。商学会賞受賞論文の原稿を完成させるために、同期の竹田君と何度も夜を明かした恵比寿のマクドナルド。こういった些細なものからでも、私は小野ゼミのことを思い出す。

閑話休題、そんな私は、上述の通りゼミ長を志望し、その念願が叶い、第15期のゼミ長を務めた。それに関連して、就職活動中、「リーダーとは、どんな人物であるべきか。」という質問をされることがよくあった。そういった質問に対して、私は、一貫して、「常に規範となるよう行動し、背中で引っ張る人物のことである。」と答えてきた。3人の男兄弟の長男として、常に手本として振る舞うように育てられてきた私は、自然とそういったリーダーとしての役割を担うことが当たり前であったのだ。

では、小野晃典研究会第15期のゼミ長としてはどうであったであろうか。確かに、入会当初は、ディベートでも中心的な役割を果たし、ベストディベーターに選出された。3年生の秋学期からは、ゼミ長として、先頭に立ってゼミの運営に勤しんだ。同期の卒論執筆の進捗が著しく悪かった際には、何とか先陣を切ろうと、執筆を進め、辛うじて商学会賞へ論文を提出し、受賞する運びとなった。

しかし、国際学会での発表の際には、英語の原稿を飛ばしてしまい、挙句の果てには、拙い英語力故に、質疑応答を穂苅さんに全て任せてしまった。卒論の締め切り直前には、自らの怠惰ゆえに、なかなか合格を頂くことができず、結果的には、同期で最後に合格を頂くこととなった。全然ダメではないか。私は全く背中で引っ張ることなどできていない上に、むしろ迷惑をかけてばかりであった。

そんな私が、自らの無力感に苛まれていたとき、支えにしていた言葉がある。「僕は後継ぎやけど、そんなに器用じゃない。あるとき、組合の大先輩、釜師16代目の大西清右衛門さんに相談したら、“とにかくつなげ”と言われた。僕が天才でなくていいのだと。技術は90か80に落ちてても、できる限りのことを息子の代に基本通り伝えて、子孫で天才の代の出現を待ちそこまでつなぐ。僕達はそういう役割でいいのだと。」<sup>5</sup> 私の尊敬する父のインタビューが掲載されていた記事を見つけたとき、私はハッと胸を突かれた。私の実家は、京都で代々仏具製造業を営んでおり、父も先祖と同様に、一家の大黒柱として家業に従事している。私が、尊敬の眼差しで見る父ですら、自身の力不足を嘆いていたのである。況や、私自身も、天才でも何でも無い、凡人である。しかし、私には、同期がいた。自らの作業が未だ終わっていないにもかかわらず、まるで自分のことのように、私の論文に含まれるミスも、血眼になって探してくれる献身的な同期がいた。さらに、私には、いや、私たち第15期生には、第16期生という後輩がいた。私たち第15期生は、手本とするには頼りない先輩であったに違いない。しかし、彼らはこの1年間、酸いも甘いも噛み分けて、ゼミ活動に邁進してきた。私は、できる限りのことは、後輩に伝えてきたつもりである。次代に天才が現れることを期待して、私は襷を後輩に繋ぐ。



次代を担う後輩たちとともに  
(著者は後列左から2番目)

<sup>5</sup> 公益財団法人京都産業 21HP, <https://www.ki21.jp/fund/jireishu/pdf20.21/2021jirei16.pdf>